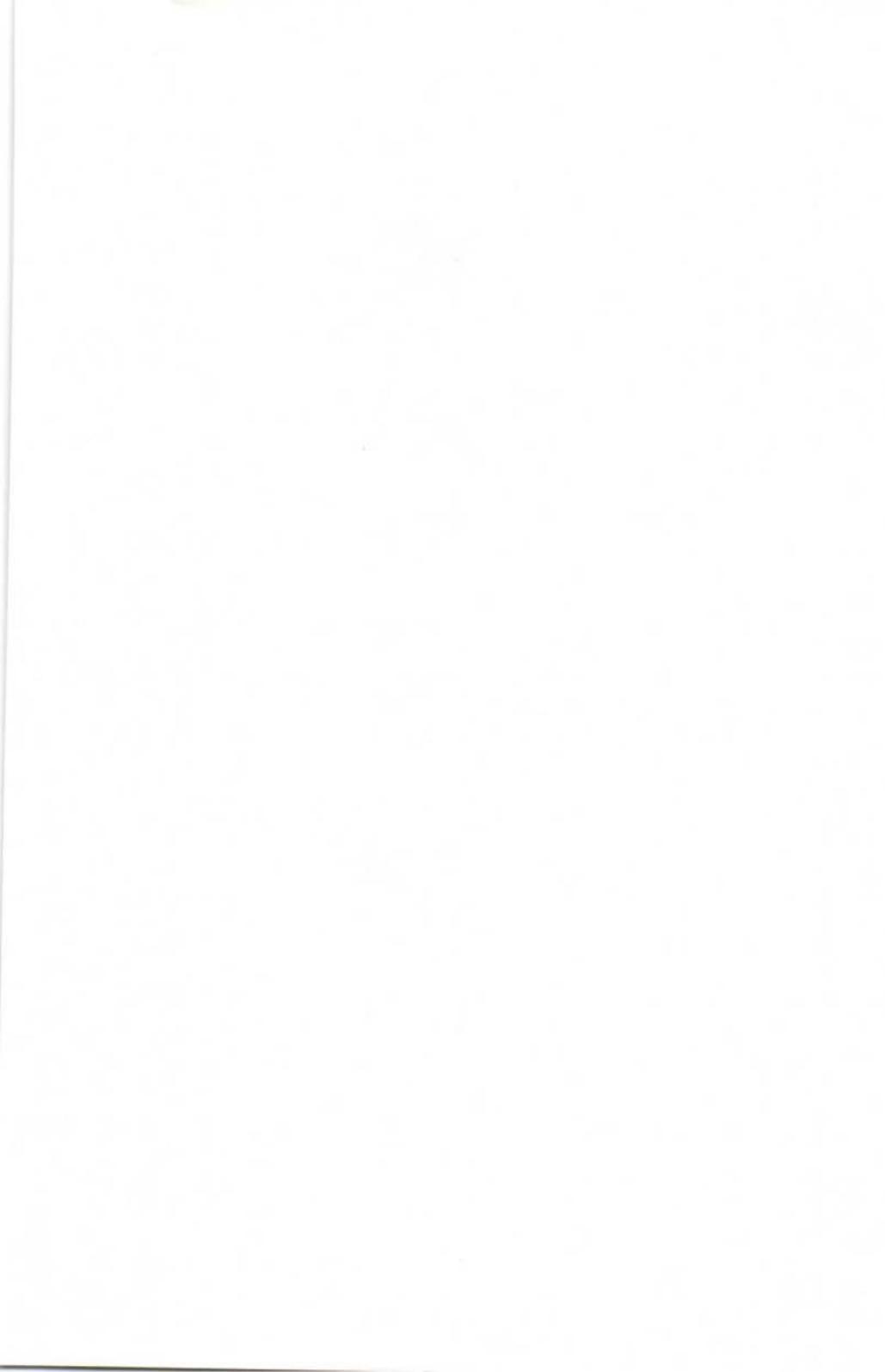


木公遺稿

木公遺稿



木公和尚遺稿に序す

昭和三十四年十二月十五日、世壽八十二才を以て遷化されて早三十三年、光陰惜むべし無常迅速時人を待たず、本当に月日の経つのは速いものです。

此の度御当山第二十二世昌道碩隆大和尚禪師冷照忌（三十三回忌）齊筵を嚴修されるに当り、現住職敬巖和尚様より焼香大導師と云う過分な大役のお話を戴き、その上木公和尚様の御遺稿の序文をとの御言葉もあり唯々恐縮いたして居ります。

小衲儀浅学非才も顧みず御言葉に甘え、師に対しての追慕の念を記し巻頭の言葉とさせて戴きます。

小衲にとりまして青春の一頁に是が非でも書き留めておきたい事が御座います。それは昭和十八年十一月八日、普濟寺開山物外可什大和尚毎歳忌の日の事です。昭和二十年三月遷化された日野宝泉寺様の金繩和尚様と御当山の木公和尚様御二人して「重昌さんの身体はお観音様と薬師様が何時もお守りして下さるから絶対に戦死しませんよ！」と親身にも勝る温情溢れるばかりの有難いお

言葉を戴きました。その翌月の十二月八日学徒出陣、第十四期飛行科専修予備学生特攻隊員でしたが無事歸郷する事が出来ました。これ偏に老禪師御二方の御法力の賜と心から感謝致して居ります。土浦の航空隊に居ります頃、木公和尚様と普濟寺先々代至敬和尚様からは必ず漢詩で激勵のお手紙を戴きました。航空隊では手紙は全部検閲があり、隊長に漢詩を解説してあげるのに苦勞をした想い出があります。

航空隊で漢詩の勉強が出来た事が現在の小衲にとってどの位役に立って居ります事か唯々頭が下ります。

御当山では去る昭和五十七年壬戌年十一月開山勅諭圓光大照禪師六百遠年諱竝諸堂落慶法要も御法縁のある各寺院諸大徳各位の越格なる御助法のもと無魔円成、そして今年先師木公和尚様の冷照忌に当り現住敬巖和尚様には四大不調の病身に鞭打って木公和尚様の御遺稿を編纂、御両親想いの当住様が汲めども尽きる事のない御恩の萬分の一にも報いたいと云う一念が切々と伝って参ります。

木公和尚様の漢詩を拜讀させて戴きますと隨身ヤエ様とお二人で艱難辛苦を共にし御苦勞されて七人のお子様を育てあげられ海よりも深い御慈愛、そして

昭和二十年五月戰災による全燒、仮本堂庫裡等の建立、日常生活の中でも何一つ不平不満愚痴をこぼさず唯寺門の復興に専念された方である事が推察され後昆を利益する事甚大であると存じます。

本小冊子の刊行に際し越格なる御法愛を賜はりました諸大徳各位に衷心より厚く御礼申し上げますと共に末筆乍ら御当山の御隆盛と御繁栄を心より御祈念申し上げますに替えさせて戴きます。

謹言合掌

平成参辛未歳参月吉祥日

武州立川玄武山普濟寺第二十六世

松華壽翁 謹撰

萬松寺第二十二世昌道碩隆大和尚冷照忌

香語

傳得木公自在禪
遺風浩浩滿齊筵
慈容難接尋何處
慕悅誰知冷照天

定中照鑑

普濟小住

壽翁九拜

木公



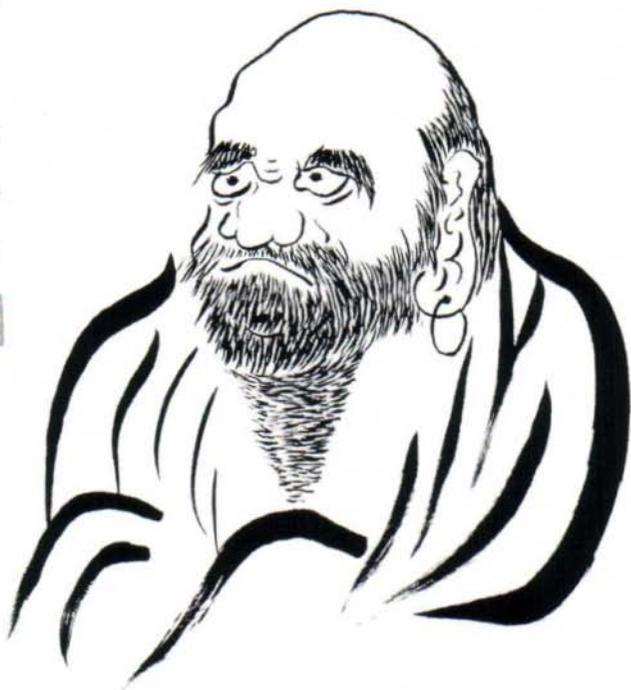
自樂平常道

平成癸卯未歲

冬月吉祥日

玄武道人

嘉尚翁書



雲鬟翠髻列天宮
湘嶺甲峰一室中
秀拔萬尋蓮岳雪
兒孫獻壽白頭翁

本五十八
史明

暹日江山無盡風
是草色泥融
飛燕子沙暖
曉鷺鳴

本五十八
史明



一
祝
語

昭和十五年四月

(普濟寺)

賀弓場重泰師晉山

聖體加尊愈見功 工風綿密一家風

長爲玄武山園主 柱杖化龍法雨中

聖體尊を加へいよいよ功を見る 工風綿密一家の風
長く玄武山園主となる 柱杖 龍と化す 法雨の中

芙山老師壽像成 賀筵喜贈呈

七十七春健更加 童顏壽像也堪誇

禪餘試問長生訣 笑指桃花源上霞

七十七春健さらに加ふ 童顏の壽像また誇るに堪ふ
禪餘試問す 長生の訣 笑って指す 桃花源上の霞

昭和二十一年

丙戌歲旦

一把茅庵劫後春 今年富勝去年貧

煮來折脚鐺中味 雲餅如錢祝吉晨

一把の茅庵劫後の春 今年の富は去年の貧に勝る
煮來って折脚鐺中の味 雲餅錢の如く吉晨を祝ふ

昭和二十三年

戊子歳旦

佛殿未成年又新 満山瑞氣満庭春

椒杯酌來微醺好 福壽花前福壽人

佛殿いまだ成らず年又新なり 満山の瑞氣満庭の春

椒杯 酌み來って微醺好し 福壽花前 福壽の人

昭和二十四年
(香福寺)

是真和尚晋山

秋晴満野稲梁豊 歩歩杖輕芳草風
我與瑞巖今也似 山中自喚主人公

秋晴野に満ち稲梁豊かなり 歩歩の杖は輕し芳草の風
我と瑞巖といまや似たり 山中 みづから喚ぶ主人公

昭和二十四年

己丑歲旦

南山獻壽聳窓前 帶雪老松不老仙

新殿祝來陽德復 謳歌今歲大豊年

南山壽を献ずれば窓前に聳ゆ 帶雪の老松不老の仙
新殿祝ひ來れば 陽徳かへる 謳歌す 今歲大豊年

昭和二十四年
五月

己丑五月假本堂成

巍然香閣萬松巔 輪奐慈門修福田

慶讚瑠璃光佛德 東方遍照界三千

巍然たる香閣萬松の巔 輪奐慈門福田を修す

慶讚す瑠璃光の佛德 東方遍く照らす界三千

昭和二十六年

辛卯歲旦

寶殿新成歲又新 惠風吹靜萬松春

欣觀輪奐莊嚴美 佛日增輝祝吉晨

寶殿新に成り歲又新なり 惠風吹いて靜かなり萬松の春
よろこび觀る 輪奐莊嚴の美 佛日增輝 吉晨を祝ふ

昭和二十七年

壬辰歲旦

剝盡群陰淑氣回 山中迎歲酌椒杯

謳歌野老春風力 梅柳櫻桃次第開

群陰を剝ぎ盡して淑氣めぐる 山中歳を迎へ椒杯を酌む
謳歌す 野老春風の力 梅柳 櫻桃 次第に開く

昭和二十七年

賀曇華老師米壽

巨福山中意氣豪 書禪一味靜揮毫

齡迎米字猶迎白 高壽南山百丈高

巨福山中 意氣豪なり 書禪一味 靜かに揮毫す

齡米字を迎へなほ白を迎ふるがごとし 高壽南山百丈高し

昭和二十八年

癸巳歲旦

満室東風迎歳新 佛恩廣大堯天春

南山献壽福田祿 擔得双肩喜字民

満室の東風歳を迎へて新なり 佛恩廣大 堯天の春
南山壽を献ず福田の祿 双肩に擔い得たり喜字の民

昭和三十年

乙未歲旦

東風吹暖入柴門 祝歲先欣酒滿樽

七十九年兼壽福 佛恩拜得拜天恩

東風暖を吹いて柴門に入る 歳を祝しまづ欣ぶ酒樽に満つるを
七十九年壽福を兼ね 佛恩 拜し得て 天恩を拜す

昭和三十一年

丙申歲旦

椒酒酌來八十春 窓梅芳處旭光新

天恩佛德擔無盡 自喚太平壽老人

椒酒酌み來る八十の春 窓梅芳しき處 旭光新なり

天恩佛德擔ひて盡くる無し みづから喚ぶ太平壽老人



二
偈
頌



昭和二十二年

圓福寺吊文英師

江雲渭樹雁音鮮 未了唱和風月緣

北小山坊秋夢冷 吊君聽雨夜如年

江雲渭樹雁音鮮かなり いまだ唱和了らず風月の緣

北小山坊秋夢冷やかに 君を吊ふて雨を聽く夜年をいかんせん

昭和二十三年
七月二十日
(永福寺)

慈光禪伯 小祥忌

江湖掛錫共參禪 呼弟呼兄是宿緣

今日小祥逢忌日 焚香默坐憶當年

江湖掛錫ともに參禪 弟と呼び兄と呼ぶこれ宿緣
今日小祥忌日に逢ふ 香を焚き默坐し當年を憶ふ

昭和二十三年
九月十三日
(香福寺)

文郁和尚大祥忌 香語

兔烏匆匆歲三遷 髣髴音容尋那邊

可愛山中秋色好 一叢黃菊競芳妍

兔烏匆匆 歲三たび遷る 髣髴たる音容那の邊にか尋ねん
愛すべし 山中秋色好く 一叢の黃菊 芳妍を競ふ

昭和二十四年
四月四日
(普濟寺)

挽芙山老師兄

行雲流水迎難停 八十五年春夢醒

挽去柩車何限情 北邙山上雨聲冥

行雲流水めぐりて停まり難し 八十五年春夢醒む
挽き去る柩車何ぞ情を限れる 北邙山上雨聲冥し

昭和二十四年
（普濟寺）

芙山老師兄茶毘香語

劫火洞然燒大千 色身雖壞法身全

喚醒八十五年夢 化作無何鄉裏仙

劫火洞然 大千を燒く 色身壞すといへども法身全し
喚び醒ます八十五年の夢 化して無何郷裏の仙となる

昭和二十四年

五月

(普濟寺)

對岳莊老漢大練忌 香語

胡蝶夢醒七七辰 影空對岳室中人

相思一倍與誰話 愁殺莊前春草新

胡蝶 夢は醒む七七の辰 影は空し 對岳室中の人

相思一倍誰とともにか話せむ 愁殺す莊前春草新なり

昭和二十四年
（小川寺）

謙讓老和尚 真影讚

謙尊光善讓 慈眼視衆生

這裏空相憶 清風匝地寒

謙尊光善く讓り 慈眼もて衆生を視る

這裏空しく相憶ふ 清風地を匝りて寒し

昭和二十四年
(小川寺)

碩雲大和尚真影讚

澄心七十五齡全 書學魯公詩謫仙

更見碩雲真面目 如来禪也祖師禪

澄心七十五齡全し 書は魯公を学び詩は謫仙
更に見る碩雲真面目 如来の禪また祖師の禪

昭和二十五年
四月四日
(普濟寺)

芙山老師兄小祥忌

春山花發鳥歌春 師逝不歸感又頻
未覺池塘芳草夢 一回吟到一傷神

春山花發き鳥春を歌ふ 師逝きて歸らず感又頻なり
いまだ覺めず池塘芳草の夢 一回吟じて到る一傷神

昭和二十六年
一月
(小川寺)

碩雲禪師 遠波忌 香語

告別昇仙七回遷 雲師尊影是依然
鐘聲打起天宮夢 一炷返魂心字煙

告別昇仙 七回遷る 雲師の尊影 これ依然
鐘聲打ちて起る天宮の夢 一炷返魂心字の煙

昭和二十六年
四月

(普濟寺)

芙山老師兄 大祥忌

海燕回來人不還 分明難見當年顏

返魂一炷焚心字 遮莫香梁半炊間

海燕 回り来って人還らず 分明に見難し當年の顔
返魂一炷心字を焚く さもあらばあれ香梁半炊の間

昭和二十七年
九月十三日
(香福寺)

文郁禪英遠波忌 香語

烏兔七周感更深 清容髣髴那邊尋

秋風吹冷湘江上 切切堪聞蟋蟀吟

烏兔七周感さらに深し 清容髣髴那の邊にか尋ねん

秋風吹いて冷やかなり湘江のほとり切切として聞くに堪ふ蟋蟀の吟

昭和二十八年

一月

(南養寺)

弔鐵眼老契

禪劍一如道徹真 琢磨八十五回春

忽然脱却旧皮袋 色即是空無位人

禪劍一如道 真に徹す 琢磨八十五回の春

忽然として脱却す旧皮の袋 色即是空無位の人

昭和二十八年
十月

開山大覺禪師開創七百遠年忌 恭賦奠

曾越波濤到日東 法幢建矣唱宗風

拈華微笑傳心印 七百春秋道益隆

かつて波濤を越え日東に到り 法幢建て宗風を唱ふ
拈華微笑心印を傳へ 七百春秋 道ますます隆なり

昭和三十四年

一月

(南養寺)

鐵眼師兄 遠波忌賦奠

六十年前遊柳城 三衣一鉢契同行
齋筵今日山花落 寂寂奠香何限情

六十年前 柳城に遊び 三衣一鉢 同行をちぎる
齋筵今日山花落つ 寂寂たる奠香何ぞ情を限れる

昭和三十四年
六月二十九日
(福正寺)

鐘山師 脱光忌賦奠

逝水落花不止痕 故人永別斷心魂

忌辰七七恍猶夢 春草青青哭墓門

逝水落花 痕を止めず 故人永別 心魂を斷つ

忌辰七七恍としてなほ夢のごとく 春草青青墓門に哭す

昭和二十八年
十月

時頼公七百年忌 謹賦奠

鎌府征夷賢相公 頭陀修行察民風

欽崇七百餘年澤 興國法燈照海東

鎌府征夷 賢相公 頭陀修行 民風を察す

欽崇す七百餘年の澤 興國の法燈海東を照らす

昭和三十一年
八月

弔曇華老師

說法度生半百年 傳燈承得默雷禪

曇華花落花開日 面目本來如是圓

說法度生半百年 傳燈承け得たり 默雷の禪

曇華花落ち花開く日 面目本來是の如く圓かなり

休哉老漢世三回忌之辰 展墓

花落水流萬感牽 嚴師三十有三年
恩重於岳深於海 伏奉香華拜塔前

花落ち 水流れ 萬感牽く 嚴師三十有三年
恩は岳より重く海より深し 伏して香華を奉じ塔前に拜す

昭和三十三年
九月十三日
(香福寺)

文郁和尚稱名忌 香語

秋月秋風吹夢醒 黃花葉上露冷冷

十三回忌薦何物 一炷心香無字經

秋月秋風 吹いて夢醒め 黃花葉上 露冷冷

十三回忌何物をか薦めむ 一炷の心香無字の經

昭和十六年二月
井上 瑛

挽無光莊主

精忠殉國武兼文 蒙境經綸多待君

一慟春風幡谷暮 哀哀心緒恰如焚

精忠殉國 武 文をかね 蒙境の經綸多く君を待つ
一慟す春風幡谷暮れ 哀哀たる心緒恰も焚くごとし

昭和十六年二月

陸軍中将

井上閣下

悼井上閣下

皇德普施蒙境民 善隣文化日爲新

忽然他界堪哀惜 無限抱懷有限身

皇德あまねく施す蒙境の民 善隣の文化日にために新なり
忽然他界す哀惜を堪ふ 無限の抱懷 有限の身

昭和二十六年

弔溪南居士

吟月詠花趣日新 一枝詩筆寫精神

醒來八十五年夢 脚却塵衣歸本真

月を吟じ花を詠じ趣日に新なり 一枝の詩筆精神を寫す
醒め来れば八十五年の夢 塵衣を脱却して本真に歸る

昭和二十六年
小島誠之進

溪南居士五七日忌

推敲憶友那邊尋 獨賦招魂感更深

庭樹春來花又發 息機堂寂鳥空吟

推敲友を憶ひ那の邊にか尋ねん 獨り賦す招魂の感更に深し
庭樹春來りて花また發く 息機堂寂かに鳥空しく吟ず

昭和二十六年

悼小島元一君

螢雪同窓互琢磨 辛商相望歲空過

無端聞訃只驚該 東向悼君奈感何

螢雪の同窓互に琢磨す 辛商 相望めば歲空しく過ぐ

端なくも訃を聞きただ驚該 東向して君を悼む感を奈何せん

昭和二十七年
三月一日

溪南居士小祥忌

庭樹花開鳥告春 息機堂寂奈傷神

風光滿目與誰賦 獨把小詩展故人

庭樹花開き鳥春を告ぐ 息機堂 寂として傷神をいかんせん
風光滿目誰とともにか賦せん 獨り小詩を把つて故人に展ず

弔石廼門景嘉翁

六十餘年過夢邊 春風秋月隙駒遷

四人學友三人逝 空隔幽明獨黯然

六十餘年夢と過ぐるあたり 春風秋月 隙駒遷る

四人の學友三人逝く 空しく幽明を隔てて獨り黯然

昭和二十九年

五月

(南養寺)

弔兔輪大姉

九十八年春夢移 可憐花落不回枝

栽松軒裡凌霜節 媼逝喚誰話往時

九十八年春夢移 憐むべし花落ちて枝に回らず

栽松軒裡凌霜の節 媼逝き誰を喚び往時を話せん

昭和二十九年

鶴川英靈塔 香語

兩頭截斷絶恩讎 二百英靈寶塔収

不朽偉勳傳萬古 無窮忠烈照千秋

兩頭截斷し恩讎を絶つ 二百の英靈 寶塔に収まる
不朽の偉勳萬古に傳はり 無窮の忠烈千秋を照らす

招魂祭

砲彈如雨轟雷霆 忠膽義心仰典型

野戰攻城功業赫 大東洋裡永平寧

砲彈雨の如く雷霆を轟かす 忠膽義心典型を仰ぐ
野戰攻城 功業赫たり 大東洋裡 永く平寧

昭和三十四年

弔五十嵐父子

翁參都政創高巒 兒任啓蒙務育英

大廈一朝亡柱石 泣埋靈骨不埋名

翁は都政に參じ高巒を創む 兒は啓蒙に任じ育英に務む

大廈一朝柱石をうしなふ 泣いて靈骨を埋むるも名を埋めず

三
雜
詠
抄



昭和二十年
五月五日

(一) 山中集

序

陶弘景詩曰山中何在處 嶺上多白雲 唯自可怡

好不堪持 贈君採而名我集

陶弘景の詩にいはく山中いづれの處にかある 嶺
上白雲多し ただみづからたのしむべきも好んで
持するに堪へず 君に贈り採りてわが集に名づく

昭和二十年八月

乙酉八月終戦

五首

邦君告降戰茲休 夷國將軍制八洲

大憲革焉民法廢 魔群橫暴不堪憂

邦君降を告げ戰ここに休み 夷國の將軍八洲を制す
大憲あらたまり民法廢る 魔群橫暴 憂へに堪へず

昭和二十年

其二

八歳遠征耕地荒 三軍無力國無糧

豺貅斃矣戰車碎 將相殉難解武裝

八歳の遠征耕地荒る 三軍力無く國に糧無し

豺貅斃れ戰車碎く 將相難に殉じ武裝を解かる

其三

都人爲隊柳陰屯 負橐負囊妥食村

村婦得衣他得米 猶看民俗古風敦

都人隊をなして柳陰に屯す 橐を負ひ囊を負ひ食 村に覓む
村婦衣を得 他は米を得 なほ民俗古風の敦きを看るごとし

其四

重税誅求富閥隳 兆民無産國無財

廟堂戰敗是誰罪 屈辱千秋難挽回

重税誅求 富閥隳ゆ 兆民 産無く國 財無し

廟堂戰敗るこれ誰の罪ぞ 屈辱千秋挽回すること難し

昭和二十二年

其五

一擲乾坤萬策窮 連年征戰貨財空

巨丸爆擊濛幢裂 腸斷忠魂泣海中

乾坤を一擲して萬策窮す 連年の征戰貨財空し
巨丸爆擊濛幢裂く 腸は斷つ忠魂海中に泣くを

昭和二十二年

偶成

寺失耕田僧失糧 魔軍襲到弋兼羌

法輪不轉法燈暗 無奈修羅佛苑荒

寺は耕田を失ひ僧は糧を失ふ 魔軍襲ひ到る戎 羌をかぬ
法輪不轉法燈暗く 修羅をいかんともする無く仏苑荒る

昭和二十四年

農地解放

開放民田法特殊 平等農地小農蘇

耕耘自作有餘粟 無又大家促貢租

民田を解放す法特殊 農地を平等にし小農よみがへる
耕耘自作餘粟あり また大家の貢租をうながす無し

昭和二十五年
五月五日

重五 登巨福山 六首

遠來衝雨扣禪関 幾處塔頭新緑間

蒲節蘭湯僧惠浴 心身清淨宿仙寰

遠來雨を衝いて禪関を扣く 幾處の塔頭新緑の間
蒲節の蘭湯 僧惠浴 心身清淨 仙寰にやどる

昭和二十五年

福山早晨

雲封谷口雨成霖 隱隱曉鐘響翠岑

禮佛澄心三昧境 海東法窟古禪林

雲は谷口を封じ雨霖となる 隱隱たる曉鐘翠岑に響く
禮佛澄心 三昧の境 海東の法窟 古禪林

昭和二十五年

上山門

應供門頭禮半千 龍乘騎虎羽衣仙

恍疑兩腋清風起 身在白雲有頂天

應供門頭 禮半千 龍乘騎虎 羽衣の仙

恍として疑ふ兩腋清風起るを 身は白雲有頂天に在り

昭和二十五年

呈大井総長

擔任宗綱衆望揚 伽藍復興理頽荒

多師辛苦經營力 佛殿山門仰放光

宗綱を擔任し衆望揚る 伽藍の復興 理 頽荒す

師の辛苦經營力を多とす 佛殿山門仰げば光を放つ

昭和二十五年

詣勝上嶽

勝上靈峰接諸天 遙登石徑翠微巔

瑟瑟神鼓蒼蒼曙 奉賽慇懃拜殿前

勝上靈峰 諸天に接す 遙かに登る石徑 翠微の巔

瑟瑟たる神鼓蒼蒼の曙 賽を奉じて慇懃たり拜殿の前

昭和二十五年

詣鶴岡八幡社

右府當年放鶴岡 巍然祠廟鎮東方

源家偉業傳千古 神鏡昭昭神德昌

右府當年 鶴岡をひらく 巍然たる祠廟東方を鎮む

源家の偉業千古に傳ふ 神鏡昭昭として神德昌なり

昭和二十五年

周齊画伯描巨松見寄欣然題

龍幹蔚蒼凌碧空 傲霜勁節起清風

山中勝友唯君在 笑對後凋老木公

龍幹蔚蒼 碧空を凌ぎ 傲霜勁節 清風起る

山中の勝友唯君のみ在り 笑って對ふ後凋の老木公

昭和二十六年
晚秋

杜鵑讚并叙益頭俊南画

杜鵑一名不如歸。南邦禽春晚來。眼黃褐色。
羽灰青。腹毛白有黑斑。尾羽黑長橫白線。棲
於森林。其鳴奇。騷人愛焉。借鶯巢產卵。鶯
爲假親哺育雛。既長而成鵑。秋風吹而南歸矣。
古賢曰生者寄也、死者歸也。學者須有省於鵑

月落西窓煙鎖林 夏山入夢聽鵑音

北來南去羈旅友 夜夜喚醒孤客心

杜鵑一名不如歸。南邦の禽、春晚く来る。眼は黄褐色。羽は灰青。腹毛白く黒斑あり。尾羽黒く横に白線長し。森林に棲む。その鳴奇なり。騷人これを愛す。鶯の巢を借りて卵を産む。鶯かりの親となり雛を哺育す。すでに長じて鵑となる。秋風吹いて南に歸る。古賢いはく、生者は寄り死者は歸る。學者すべらく鵑にかへりみる事あるべし。

月西窓に落ちて煙林を鎖す 夏山夢に入り鵑音を聴く
北来南去 羈旅の友 夜夜喚び醒ます孤客の心

昭和二十七年

詠梅 贈大石信儀君

鶴骨龍姿氷玉清 芳香馥郁發朝晴

凌霜貞節高松配 可愛春風百樹兄

鶴骨龍姿氷玉清し 芳香馥郁朝晴に發く

凌霜貞節高松配す 愛すべし春風百樹の兄

昭和二十七年

壬辰五月熱海 桃山莊作 二首

海上高樓百仞峰 南薰習習綠陰濃

偶來勝地作遊客 泉浴風吟慰老慵

海上の高樓百仞の峰 南薰習習 綠陰濃かなり

たまたま勝地に來つて遊客となり 泉浴風吟老慵を慰む

其二

吸収靈氣導丹田 靜愛波濤響曉天

穹水一碧瑠璃界 廣寒宮裏夢飛仙

靈氣を吸収して丹田に導く 靜かに愛す波濤曉天響にくを
穹水一碧 瑠璃の界 廣寒宮裏 飛仙をゆめむ

昭和二十八年

糧難

戰塵堆裡八迎春 父子分離泣飢人

斗米千圓官給少 都民覓食乞農民

戰塵堆裡八たび春を迎へ 父子分離す泣飢の人

斗米千圓官給少なく 都民食を覓めて農民に乞ふ

昭和三十三年
五月十八日

訪南養精舎

古刹春過花已空 緑陰深處坐薰風

四人師友登仙去 憶到美髯劍俠翁

古刹春過ぎて花すでに空し 緑陰深き處薰風に坐す
四人の師友 登仙し去り 憶ひ到る美髯劍俠の翁

昭和三十二年
十月十三日

参内宮城拜観

黄鐘音律調紛紛 貴徳西王樂入雲

此曲祇應天上有 人間得能幾回聞

黄鐘の音律調べ紛紛 貴徳西王樂 雲に入る

この曲ただまさに天上有るべし 人間よく幾回か聞くことを得む

昭和三十四年
「和光」十月号

函山遊草

八首

函山携友暮春來

風詠浴沂又快哉

莫笑耽遊吾與點

仙郷靈液滌心埃

函山友を携へ暮春に来る 風詠浴沂また快なるかな

笑ふなかれ耽遊われ點に與かるを 仙郷の靈液に心埃を滌ぐ

昭和三十四年
「和光」十月号

塔澤

頭上青巒山又山 不聞禽語聽潺湲

晚春塔澤勝遊樂 人歩南薰綠樹間

頭上の青巒山また山 禽語を聞かず潺湲を聴く

晚春 塔澤勝遊の樂 人は歩む南薰綠樹の間

昭和三十四年
「和光」十月号

十國峠

翠巒重疊聳晴空 勢走長蛇似競雄

輾去青春草路 奔輪十國入眸中

翠巒重疊晴空に聳え 勢走の長蛇雄を競ふに似たり
輾去す 青春草の路 奔輪十國 眸中に入る

昭和三十四年
「和光」十月号

蘆湖

風光明媚此仙區 春水春山開畫圖

躑躅登仙千仞壑 輕舟晴日渡蘆湖

風光明媚これ仙區 春水春山畫圖を開く

躑躅登仙千仞の壑 輕舟晴日蘆湖を渡る

昭和三十四年
「和光」十月号

早雲山

軌輪直上早雲山 尚有峻峰不可攀

大涌谷煙生脚底 玉蓮秀麗聳雲間

軌輪直上早雲山 なほ峻峰有り攀づるべからず

大涌谷の煙脚底に生じ 玉蓮秀麗雲間に聳ゆ

昭和三十四年
「和光」十月号

古關

古關荒趾夕陽殘 行路難於函谷難

今日鷄鳴無用術 一條大道到長安

古關荒趾夕陽殘り 行路函谷の難より難し

今日鷄鳴無用の術 一條の大道長安に到る

昭和三十四年
「和光」十月号

箱根神社

蒨蔚森深湖上宮 巨杉矗立聳蒼空

祐神曾子報親志 獻賽兩郎賛智雄

蒨蔚森は深し湖上の宮 巨杉矗立し蒼空に聳ゆ

祐神曾子親の志に報ゆ 賽を兩郎に獻じて智雄を賛ふ

昭和三十四年
「和光」十月号

小涌園

黄樓架在翠微峰 嵐靄乍開又乍封

小涌湯池來澡浴 沐餘高臥豁心胸

黄樓の架は翠微の峰にあり 嵐靄たちまち開き又たちまち封ず
小涌湯池澡浴に來り 沐餘高臥し心胸を豁く

昭和三十四年
「和光」十月号

偶吟

牡丹花發草拖藍 二十四番春色酣

日午小禽啼不止 荷鋤曳犢緩歸菴

牡丹花發いて草藍を拖き 二十四番春色酣なり

日午小禽啼いて止まらず 鋤を荷ひ犢を曳き緩く歸菴す

昭和三十四年
「和光」十月号

二一首

南岡雨霽綠芊芊 増産逐年多麥田

耕息薰風林下跼 鶯歌睨皖蝶飛翩

南岡雨霽れて綠芊芊たり 増産年を逐ひ麥田多し

耕息め薰風林下に跼まれば 鶯歌睨皖蝶飛んで翩る

昭和三十四年
「和光」十月号

其三

一領單衿暖始通 茶煙輕颺小菴中

燕雛求哺呖黃吻 蝶翅尋花遶碧叢

一領の單衿暖始めて通じ 茶煙軽くあがる小菴の中

燕雛哺を求め黄吻をひらき 蝶翅花を尋ねて碧叢を遶る

喜雨

慈雨蘇禾水滿田 畔頭農叫大豊年

喜同讀喜雨亭記 沽酒家家禮上天

慈雨禾を蘇らせて 水田に満つ 畔頭の農は叫ぶ大豊年
喜びは喜雨亭記を讀むに同じ 沽酒の家々上天に禮す

玉川納涼 二首

数峰青黛一川煙 陣陣水風江月圓
骨冷魂清忘午熱 新涼萬斛不要錢

数峰の青黛一川煙り 陣々たる水風江月圓かなり
骨冷え魂清く午熱を忘る 新涼萬斛 錢を要せず

其二

漁火風涼映浪鮮 鐘聲遙渡翠微巔

烏啼月落湘江夕 不識何人聽客船

漁火風涼しく浪に映じて鮮かなり 鐘聲遙かに渡る翠微の巔
烏啼き月落つ湘江の夕 識らず何人か客船に聽くを

登高尾山

靈峰高尾再登攀 夾道老杉新綠間

溪谷蜿蜒千仞險 翠鬢無數萬重山

靈峰高尾ふたび登攀 道を夾む老杉新緑の間

溪谷蜿蜒 千仞の險 翠鬢無數 萬重の山

梅雨

細雨無聲連日霖 月沈潭底夜陰深

一蛙鳴處四隣寂 鼓吹遙聽天鼓音

細雨聲無し連日の霖 月は潭底に沈み夜陰深し

一蛙鳴く處四隣寂たり 鼓吹遙かに聽く天鼓の音

其二

黄梅時節雨冥冥 讀史銷閑且讀經

終日柴門人到少 郭公鳴處老杉青

黄梅の時節雨冥冥 讀史銷閑かつ讀經

終日柴門人到る少なく 郭公鳴く處老杉青し

五月十三日作

五月十三天氣晴 南岡北塢午風輕

綠陰處處鶯聲滑 芳草如氈逐蝶行

五月十三天氣晴 南岡北塢午風輕し

綠陰處處鶯聲滑かに 芳草氈の如く蝶の行くを逐ふ

昭和三十四年
五月

奉祝皇太子御成婚

修儀太子出皇城 鶴駕揚揚鞭玉驄

沿道人民齊奉祝 我皇寶祚萬年聲

儀を修め太子皇城を出づ 鶴駕揚揚玉驄に鞭うつ

沿道の人民 齊しく奉祝 我が皇寶祚萬年の聲

(二) 松琴閣詩鈔

序

大東亞戰一敗塗地。米機爲群襲帝都。昭和乙酉五月二十五夜燒夷彈投下凡千餘箇。伽藍燒盡化空。八月十五日天皇至米將麾元帥之營乞降謝罪國辱何忍。國無秩序、民無衣食。改大憲、服米軍統治。耕地被奪、通貨封鎖。收斂無不到。嗚呼曹豈座而待餓死哉。乃努力耕耘。嘗塩臥薪。遮莫世態變遷。晝耕夜讀。此篇則忙中閑吟也。又老後之慰安也。

序

大東亞戰一敗地にまみる。米機帝都を群襲する
ため昭和乙酉五月二十五夜、燒夷彈投下およそ
千餘箇。伽藍燒け盡き空と化す。八月十五日天
皇、米將麾元帥の營に至り降を乞ひ謝罪す。國
辱何をか忍ばむ。國に秩序なく民に衣食なし。
大憲を改め米軍の統治に服す。耕地奪はれ通貨
封鎖さる。収斂到らざるなし。ああ曹あに座し
て餓死を待たむや。すなはち努力して耕耘す。
塩を嘗め薪に臥す。さもあらばあれ世態變遷
す。晝は耕し夜読む。この篇すなはち忙中の閑
吟なり。また老後の慰安なり。

昭和二十年五月

乙酉重五

二首

菖蒲花發綠成陰

佳節老鶯憐獨吟

學國遠征人未返

遙傳萬里柳營音

菖蒲花發きて綠陰となる

佳節の老鶯獨り吟ずるを憐れむ

學國遠征人いまだ返らず

遙かに傳ふ萬里柳營の音

其二

雨後觀山眼又青 滿園晴日舞蜻蜒

武經一卷讀殘去 閑逐蝶飛遶小庭

雨後山を觀れば眼また青し 滿園晴日蜻蜒を舞はす

武經一卷讀み殘し去り 閑かに蝶飛ぶを逐ひ小庭を遶る

乙酉五月大東亞戰不利。米國空軍襲ニ我帝都一。
每夜數百爲レ隊飛來。警報頻傳 二一首

警報頻頻敵襲來 飛機夜半轟萬雷

帝京力盡防無術 如白爆丸鐵壁墮

警報頻頻敵襲來 飛機夜半 萬雷を轟かす

帝京力盡き防ぐに術無し 白の如き爆丸鐵壁墮ゆ

其二

飛機列隊似鴉群 月落流星閃黑雲

百萬蒼生無避處 轟然爆擊滿城焚

飛機の列隊鴉群に似たり 月落ち流星黒雲に閃めく

百萬の蒼生避くる處無く 轟然爆擊滿城焚く

乙酉五月廿五夜半空襲益甚。飛機攻ニ帝京ニ途次
投ニ下燒夷彈千餘箇。轟然爆破炎炎燒。伽藍一瞬
化ニ阿鼻地獄一。時鈴森學童六十名疎開在ニ本堂一。

彈丸如雨降紛紛 焔焔佛堂一瞬焚

六十學童逃處失 燎原猛火雉兒群

彈丸雨の如く降りて紛紛 焔焔として佛堂一瞬に焚く
六十の學童逃ぐる處失ふ 燎原の猛火雉兒の群れ

昭和二十年五月

災後作 二首

戰火猛威過暴秦 燒經燒寺佛神瞋

嗚呼天網疎無漏 泣説輪廻訴九旻

戰火猛威暴秦に過ぐ 經を燒き寺を燒き 佛神瞋る

嗚呼天網疎にして漏るる無し 泣いて輪廻を説き九旻に訴へん

其二

鳥啼花落日正長 燒屋燒衣又燒糧
色即是空君止說 寺無佛像燕無梁

鳥啼き花落ち日正に長し 屋を燒き衣を燒き又糧を燒く
色即是空 君説くを止めよ 寺に佛像無く燕梁に無し

昭和二十年？

偶成 二首

劫火洞然壞大千 七堂伽藍一爆煙

須期輪奐復興美 巍巍寶殿耀九天

劫火洞然 大千を壞し 七堂伽藍 一爆の煙

すべからく期すべし輪奐復興の美 巍巍たる寶殿九天に耀くを

其二

戰破國窮無處窮 失衣失居食最空

耕鋤日不違他顧 我與鉏耨一不同

戰破れ國窮し窮する處なし 衣を失ひ居を失ひ食もつとも空し
耕鋤日に他顧する違あらず 我と鉏耨と一にして同じからず

昭和二十年？

偶成 二首

仙頌芳詩一味禪 德維昌矣道維全

自今閑適萬松境 種月耕雲汲翠泉

仙頌芳詩一味の禪 徳はこれ昌にして道これ全し

今より閑適萬松の境 月にうゑ雲に耕して翠泉を汲まん

昭和二十二年？

其二

五十年来一指禪 舉來舉去得瓦全

萬松溪上閑老鶴 恰似百丈學老泉

五十年来一指の禪 舉げ来り舉げ去り瓦全を得たり

萬松溪上閑かなる老鶴 あたかも百丈に似て老泉を學ぶ

昭和二十三年

寄芙山老師兄

窓對芙山門玉川 禪餘一樂唱酬圓

無聲詩也有聲畫 八十四年降謫仙

窓は芙山に對し門は玉川 禪餘一樂唱酬圓かなり

無聲の詩また有聲の畫 八十四年 降謫仙

昭和二十三年

題芙山老師兄畫 二首

隔霞山下避秦村 花發鳥啼碧水溫

兩岸風光堪畫處 載春小艇出桃源

霞を隔て山下秦を避くる村 花發き鳥啼き碧水溫し
兩岸の風光畫處に堪へ 春を載りて小艇桃源を出づ

昭和二十三年

其二

霜降江村暮色寒
蒹葭處處夕陽殘

依稀五十年前夢
晝裡神遊垂釣灘

霜は江村に降りて暮色寒し
蒹葭處處夕陽殘る
依稀たり五十年前の夢
晝裡に神遊ぶ垂釣の灘

昭和二十三年
(普濟寺)

題芙蓉觀

雲鬢翠髻列天空 湘嶺甲峰一望中

蓮嶽巍然千古雪 兒孫獻壽白頭翁

雲鬢翠髻天空に列す 湘嶺甲峰一望の中

蓮嶽巍然千古の雪 兒孫壽を獻ず白頭翁

昭和二十五年
五月十六日

小川歸途 過玉川

春江如鏡柳如絲 草綠風輕日脚遲

一路玉堤堪買醉 香魚五月上竿時

春江鏡の如く柳絲の如し 草綠に風軽く日脚遲し

一路玉堤 酔を買ふに堪ふ 香魚五月 上竿の時

昭和二十六年

柴崎壽人草廬新成 喜賦

結廬先喜得林居 鶴子梅妻又晏如

日照桑麻春已酣 晴耕雨讀勸農書

廬を結んでまづ喜ぶ得林の居 鶴子梅妻また晏如たり
日は桑麻を照らして春已に酣なり 晴耕雨讀勸農の書

昭和二十七年
八月

加茂紀遊 途上 四首

凸嶺凹溪低又高 走如長蛇伏如鼈

青嵐一帶加茂路 出峽澗流漲翠濤

凸嶺凹溪低くまた高し 走ること長蛇の如く伏すること鼈の如し
青嵐一帶 加茂の路 出峽の澗流 翠濤を漲らす

昭和二十七年
八月

加茂浴舎

前山雨霽愛朝光 澗水潺湲送早涼

浴後悠悠單衫好 依稀風景似家郷

前山雨霽れ朝光を愛す 澗水潺湲として早涼を送る

浴後悠悠單衫好し 依稀たる風景家郷に似たり

昭和二十七年
八月

石廊崎

絶壁千尋滄海秋 浩然イ立對瀛洲

黒潮澎湃石廊岬 大島如雲波上浮

絶壁千尋 滄海の秋 浩然イ立し 瀛洲に對す

黒潮澎湃たり石廊の岬 大島雲の如し波上に浮ぶ

石廊権現

萬里晴波對曉風 水天髣髴望何窮

千尋崖上悠然立 羽化登仙海若宮

萬里の晴波曉風に對し 水天髣髴 望何ぞ窮まる
千尋の崖上に悠然と立ち 羽化登仙す 海若の宮

(南養寺)

寄鐵眼老兄

昔遊流水又行雲 把住本來一物無

湖北江西草鞋跡 追思五十五年君

昔遊ぶ流水また行雲 把住本來一物無し

湖北江西草鞋の跡 追思す五十五年の君

昭和二十八年
厚木市小野
三橋誠一

四月訪三橋家 二首

菜黄麥緑玉川遙 雲雀午天囀碧空

渡一橋來又渡二 君家酒旆第三橋

菜黄麥緑玉川遙かなり 雲雀午天碧空にさゑづる

一橋を渡り來りまた二を渡る 君が家の酒旆第三橋

昭和二十八年

過愛甲

層巒重嶂疊青螺 菜麥田田遠罩霞

童子不知敗戰恨 紙鳶颺處樂春和

層巒重嶂 青螺をかさね 菜麥田田遠く霞をこむ
童子は知らず敗戰の恨 紙鳶颺る處春和を樂しむ

昭和三十一年
相模原市上鶴間
齋藤信子女史

二月十一日與齋藤女史遊小涌園

雲巒烟嶂似屏風 禿嶺雪殘白髮翁

一浴靈泉身垢淨 忘機百尺玉樓中

雲巒烟嶂 屏風に似たり 禿嶺雪殘る白髮の翁

一たび靈泉を浴びて身垢淨く 忘機百尺玉樓の中

昭和三十一年
十月六日

觀菊御苑

二首

雨後秋晴猶小春 觀菊御苑愛清新

天門不鎖偕其樂 陋巷荷恩一老民

雨後の秋晴なほ小春のごとく 菊を御苑に観て清新を愛す
天門鎖さずその樂をとみにす 陋巷恩を荷ふ一老民

昭和三十一年
十月六日

其二

玉蘂霜葩翠葉鮮 如龍如瀑奔飛泉

栽培辛苦懸崖巧 品白評黃賞麗妍

玉蘂霜葩翠葉鮮かなり 龍の如く瀑の如く飛泉奔らす
栽培の辛苦 懸崖の巧 品目評黃麗妍を賞づ

門頭即目 二首

城山翠滴萬松谿 挿得新秧風露萎

靜愛朝陽涼氣動 白鷗飛邊水雞號

城山翠滴萬松の谿 新秧を挿し得て風露萎たり

靜かに愛す朝陽涼氣動くを 白鷗飛ぶあたり水雞號く

其二

秋霖霜降見天工 一壑一丘活畫同

好景般般溪上樹 白雲黃葉半山紅

秋霖霜降天工を見る 一壑一丘 活畫に同じ

好景般般たり溪上の樹 白雲黃葉半山紅なり

祝須崎母堂喜壽

七十七年喜壽辰 童顏鶴髮小仙人

養來無事長生術 酩酒重祝米字春

七十七年喜壽の辰 童顏鶴髮 小仙人

養來無事長生の術 酩酒重ねて祝はん米字の春

八王子市千人町
(興岳寺)

寄興岳寺主

寺在萬松新翠中 甲峰信嶺聳蒼空
巍然輪奐高堂美 興岳禪師功德隆

寺は萬松新翠の中に在り 甲峰信嶺蒼空に聳ゆ
巍然輪奐 高堂の美 興岳禪師 功德隆なり

九月十一日午睡夢有レ人 賜ニ槐安國語一卷ニ
覺後作

城裡整然宮殿新 上天授卷是真神

薰風吹覺南柯夢 一笑槐安國裏身

城裡整然宮殿新なり 上天卷を授くこれ真神
薰風吹いて覺む南柯の夢 一笑す槐安國裏の身

賀相澤菊翁大壽

二首

村政任來廿六年 善施鄉黨頌聲傳

欽君福祿壽餘慶 九十七翁不老仙

村政任せ來る廿六年 善く郷黨に施す頌聲傳ふ
君の福祿壽の餘慶をうやまふ 九十七翁不老仙

其二

廿歲奉公榮有餘 大酺再賜一門譽

天恩曠蕩及斯老 應爲兒孫日史書

翁賜ニ大嚮ニ兩回。任ニ村長及銀行重役。翁作日

誌七十餘年。齡九十七益勉。結及レ之。

廿歳の奉公榮餘り有り 大酺再び賜ふ一門の譽

天恩曠蕩斯の老に及ぶ まさに兒孫日史の書となすべし

昌道和尚 略歴

明治十年（一八七七）八月二十四日

東京府南多摩郡鶴川村小野路（東京都町田市小野路町）三四四番地に生まれる。当時先住村手陽道の子たる昌道およびその兄弟三名は何れも出生と同時に当地の名望家橋本再造の戸籍に仮りに入る。

明治二十九年（一八九六）三月二十八日

先住村手陽道（禪和）示寂により、その子昌道および実弟廣道兩名の戸籍を橋本家より抜いて普濟寺に移籍させるため南養寺重松碩維和尚仲介する。

同年四月十日、南養寺より萬松寺兼務の書類を郵送し来る。ついで五月四日、昌道および廣道の兩名、東京府北多摩郡立川村一八三六番地（東京都立川市柴崎町四―二〇―四六）普濟寺住職柴崎維船の養子として入籍する。

同年九月二十日、昌道 愛知県名古屋の徳源僧堂に掛塔のため小野路より

発つ。(十九才)この日南養寺、小山宝泉寺祝餞に来て去る。

明治三十三年(一九〇〇)十月

暫暇して萬松寺に戻る。掛錫すること五年。謙光窟に参禪。

明治四十年(一九〇七)三月

腐朽せる格子付きの山門を改築する。

同年十二月八日、愛知県海部郡南陽村福田七八番地森山伊八三男森山文郁

昌道を師として得度。

明治四十一年(一九〇八)

土藏一棟を建築。

明治四十三年(一九一〇)

四月より大正五年六月まで徒弟森山文郁に祖録を学修させる。

大正五年(一九一六)二月一日

普濟寺柴崎維船和尚の養子として分家し萬松寺住職となる。(三十九才)

同年六月二十四日、神奈川県愛甲郡玉川村小野一〇九九番地(神奈川県厚

木市小野一〇七四番地)酒造業三橋幸三郎三女、三橋ヤエを隨身とする。

昭和十九年(一九四四)三月二十日

多年当地の三地区の納税組合長として納税組合事業に尽瘁せるにより東京都長官、東京財務局長連名の感謝状を受ける。

同年八月十四日、東京都長官、品川区長と戦時下の学童集団疎開を受け入れる契約を結ぶ。翌八月十五日、東京都品川区南浜川町にある鈴ヶ森国民学校の児童職員寮母ら本堂に集団疎開して来る。はじめ児童二十八名、のちに他寺に集団疎開せる同校児童二十数名が合流する。「萬松寺学寮」として使用する。

昭和二十年（一九四五）五月二十五日

夜半太平洋戦争下、米国爆撃機の東京空襲の途次、多数の焼夷弾攻撃を受け、本堂庫裡玄関および付属建物などすべて全焼する。御本尊様はじめ仏像、仏具、過去帳、仏典類および書籍類一千余冊ことごとく灰燼に帰する。僅かに土藏一棟、山門のみが類焼を免がれる。疎開学童は火焰のなかを走りぬけて二軒ほど東方にある真言宗千手院に全員無事避難する。

この日より寺族分散して小山宝泉寺および橋本香福寺へ仮寓する。

同年十月仮庫裡を建立する。建坪十坪、平屋茅葺。つづいて十二月仮本堂建立に着手。寺族の資財と檀信徒の淨財を建立資金に充当する。

昭和二十二年（一九四七）三月

住職を辞し閑栖となる。（七十才）

昭和二十三年（一九四八）八月

屋外に東司一棟を建立する。

昭和二十四年（一九四九）

仮本堂落成。建坪十四坪、木造平屋、亜鉛板葺。

同年十二月八日、町田市小山町宝泉寺に祀る同寺末、正源寺の本尊、脇侍

および十二神将を勧請して御本尊として入仏安置する。

昭和二十九年（一九五四）五月

仮客殿着工。翌年四月完成。建坪九坪余、木造平屋、亜鉛板葺。

昭和三十四年（一九五九）十二月十五日

肝硬変により示寂。世壽八十二。

大本山建長寺より再住職の法階を贈られる。

法号 贈再住建長当山二十二世昌道碩隆大和尚禪師

同月十六日通夜、翌十七日津送、埋葬する。

跋 文

当山二十二世昌道和尚、法諱は碩隆、号は木公。昭和三十四年十二月遷化してよりすでに三十三星霜を経る。

木公幼少より詩文を好み書芸に親しむ。四書五経をはじめ十八史略、白氏文集、唐宋の詩篇を耽読す。多年に亘り詠吟せる詩偈、雜詠をはじめ墨蹟もまた多し。

一は山中集 二は木公吟稿 三は松琴閣詩鈔と題してみづから冊子に清書す。

大本山建長寺発行の「和光」誌にも幾多の詩篇を投稿し、しばしば掲載される。昭和二十年（一九四五）五月、戦禍を被り伽藍全焼の折その詩品多く焼失す。

その後歲月移って四十有余年、小衲、その詩篇の散佚を恐れ努めて蒐集し整

理して保存す。その作、加筆あり、削除あり、一語を改め一句を訂す。推敲の跡歴然たり。判読に努むるも解読し難きは、やむなく割愛す。願はくは先住これを諒恕せられむことを。

その遺稿、詞華は豊醇にして清雅。雅語は簡明にして詩趣深遠。筆勢は端正にして奔放なり。新奇巧工を求むる態なし。禪風横溢して無礙自在なり。

小衲、先住冷照忌に当り「木公遺稿」を編む。大本山建長寺の別格地たる立川市普濟禪寺の住持、弓場重昌師親しく題字ならびに序文等を賜ふ。記して深甚なる謝意を表す。

ここに「木公遺稿」編集の経緯の概要を録す。

平成参辛未歲拾月

禪臨濟

萬松小住

敬巖謹誌

木公遺稿

平成參辛未年 九月二十日 印刷
同年 十月一日 発行

町田市小野路町三四四番地

萬松寺住持

柴崎敬巖

編集
発行人

電話 〇四二七(三三)二〇四七

印刷所

東京都港区南青山二丁目十一番十七号

第一法規出版株式会社

電話 〇三(三四〇四)二二五一





